

# ポーランドが最も輝いたとき 「ワレサ 連帯の男」



監督／アンジェイ・ワイダ 脚本／ヤヌシ・グウォヴァツキ 出演  
ロベルト・ウイエンツキエヴィチ アグニシユカ・グロホフスカ ポー  
ランド語・イタリア語 127分 4月5日東京神田神保町岩波ホ  
ールにて公開 以下全国ロードショー

●1980年夏、世界の目は社会主義国ポーランドに注がれていた。政府の食料品値上げに抗議して、ゲダンスクのレーニン造船所の

労働者を先頭とする大規模なストライキが始まったからだ。ストでは、自由な労働組合の承認、スト権や表現・出版の自由、共産党員の特権廃止など21項目が掲げられ、この動きは全国に拡大。8月末、労働者の要求を大幅に認めた政労合意が成立、同時に独立自主労組「連帯」が発足した。

●ゲダンスクの争議を指導したのは、それまで無名だった一人の電気工レフ・ワレサ（正しくはヴァエンスアと発音するそうだが、日本での通称に従う）だった。この映画はワレサと彼の妻ダスタを中心に、ポーランド人民が体験した激動の70～80年代を描く。ワレサは頑強な職人気質の労働者、ダスタは勝気で愛情深い主婦。狭い集合団地で6人の子どもを育てる、どの国にも居そうな夫婦が、突然「時の人」となり、世界中のジャーナリストから追いかける。だが彼らの人生への姿勢は変わらない。アパートに上がりこんでインタヴューを試みる記者たちを凄じい剣幕で追い出すダスタの姿は、爽快な印象を与える。

●ポーランドの近・現代史を60年にわたって追求してきた88歳の巨匠アンジェイ・ワイダが、「大理石の男」（76年）「鉄の男」（80年）に次いでゲダンスクの闘争を取り上げた3作目である。検閲や思想統制がまだ厳しかった時代の前2作と比べ、警察の弾圧や取り調べの描写などがリアルになったが、登場人物たちを英雄視せず、自由を求める不完全な人間として描く態度は共通している。

●歴史的な政労合意のあと、「連帯」参加者は成人人口の半数に近い1千万人に達した。しかし政労合意はなかなか実行されず、息詰まる対立が続く中、国境に集結するソ連軍を背景に、ヤルゼルスキ政権は81年末戒厳令に踏み切る。ワレサをはじめとする「連帯」幹部はいつせいに拘束された。83年にノーベル平和賞を授与されるが、ワレサは国外に出られず、代理で表彰式に出席したダスタは、帰国のさい税関で下着まで調べられるという屈辱を受ける。

●その6年後、カトリック教会が介入して政府と反体制勢力が一堂に会する「円卓会議」が開かれ、その合意に基づいて行なわれた選挙で「連帯」が勝利、社会主義圏初の非共産党政権を生んだ。折からベルリンの壁崩壊をはじめとする東欧民主化の激流の先頭を切り、ポーランド人民の希望の灯が最も輝きを増したところで映画は終わる。

●ワイダは90年の選挙で上院議員に出馬して当選したが、「連帯」の分裂後はワレサ批判派の民主連合に加わった。ワレサは90年末大統領に就任したが、支持基盤の「連帯」は分裂を重ね、人民の支持も急速に失った。誰もが知っている「連帯」のこうした没落を、ワイダはあえて描こうとしなかった。ポーランドが最も美しく燃えたのは90年までだったと考え、90年以降は別の物語と見ているのかもしれない。

本野義雄（もとの・よしお／本誌編集委員）